



「KOMABA DAY」は月に一度実施している日で、世界で起こっている様々な問題に子どもたちが触れる機会を作っています。また、同日は募金箱も設置します。集まった募金は災害などの緊急支援や KOMABA の開校以来、その活動を応援し続けているトータルペインター・ミヤザキ ケンスケさんのプロジェクト OVET THE WALL に役立てられます。なお楽しみながらの活動を目指しているため、「KOMABA DAY」では講師は私服で授業をし、生徒は授業中の飲食を可としています。

## 「想定外」に対応すること

### 東日本大震災 10 年 想定外の危機、教訓は今も

日本、そして世界が震えたあの日から 10 年がたつ。もう 10 年か、まだ 10 年か。感じ方は様々だろう。大地震と津波、そして原子力発電所の事故、かつてない複合危機となった東日本大震災。10 年という節目を私たちはコロナ禍という新たな危機のもとでむかえる。

大震災は日本に多くの課題を突きつけた。原発依存のエネルギー政策、少子高齢化・人口減少と地方の疲弊、政府の危機管理体制の不備――。

10 年がたち、道路整備などインフラ復旧は進んだが、震災があぶり出した難題への対応は道半ばだ。

そこにコロナ禍という新たな試練が降りかかった。今回も感染症拡大と経済悪化の双方に対処が必要な複合危機だ。

大震災後に防災面の対策は進んだが、感染症という新たな脅威に政府は無防備だった。

01 年・米同時テロ、08 年・リーマン危機、11 年・東日本大震災、そして 20 年のコロナ禍――。

今世紀に入り、世界では「想定外」「100 年に 1 度」などと称される深刻な危機が多発している。危機は繰り返すが、そのたびにその姿を変える。「想定外」の危機に対応するしなやかさが国家にも国民にも求められる時代になった。



震災から一か月後の石川(KOMABA 塾長)の宮城の実家の部屋。両親は「片付けてもどうせ余震でまた倒れるから、お前(石川)が帰ってきたら片付けさせようと放っておいたんだ」と笑いながら言った。



震災から一か月後の宮城の沿岸部。目と胸に焼き付いて一生忘れられない「同じような」風景が延々と続いていた。(撮影:石川)

東日本大震災、コロナ、「日常」は突然「非日常」に転じ、未来は予測不可能であることをひしひしと感じさせられます。そして、「想定外」なことに柔軟に対応する力が試されています。そんな世の中で生きていくため、私たちは強さ、そしてしなやかさを身に付けなければいけません。他人事ではなく、一人一人が関心や当事者意識を持って過去から学ばなければ、同じ過ちや後悔は何度でも繰り返されてしまいます。地震発生当時学生だった私も、大人になった今、震災を知っている者としてその意識を伝えていく責任世代であることを強く感じています。(谷口)